



一般社団法人北海道身体障害者福祉協会
会長 堂前文男



第66回全道身体障害者福祉大会石狩大会の開催に当たり、一言ご挨拶申し上げます。

サケとニシン文化に象徴される歴史あるまち、広大な森と海や山の幸に恵まれた豊かなまち、世界に開かれた石狩湾新港のあるまち石狩市の全面的なご協力と、隣接する北のリゾートエリア「シャトレゼガトーキングダムサッポロ」において、66回目の全道福祉大会が開催されましたことはこの上ない喜びであります。

本大会の開催にあたりましては、石狩市をはじめ福祉関係諸団体、多くのボランティア、市民の皆様、そして石狩市身体障害者福祉協会の皆様方には、大変なご尽力を頂きましたことを、この場をお借りしまして心から感謝申し上げます。

永年にわたり、地域社会での障がい福祉活動の推進や、ご自身の障がいを克服され、障がい者の範となる人生を歩まれ、この度の表彰された皆様方に、心からの敬意とお祝いを申し上げます。これからも健康に留意され、それぞれの地域で、より一層活躍されることをご期待申し上げます。

さて、障害者差別解消法施行から一年半が経ちました。全ての国民が、障がいの有無によって分け隔てられることなく、相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の実現に向け、障がいを理由とする差別の解消を推進することを目的として、全国各地で様々な取り組みが行われており、道内においても障がい者条例による地域づくり委員会や各地域での自立支援協議会等々での取り組みも行われてきました。本協会加盟団体でも様々な取り組みが行われていると思います。

しかし、そうした中で、全国で発生している地震・地域的豪雨被害等々により被災された障がい者・家族への支援は不備であり、道内においても昨年8月には、台風10号による空知川の堤防決壊により特別養護老人ホームが被災するなど、何処の地区においても何時災害に見舞われるかの危険にあり、災害の備えと社会的弱者への安全配慮が望まれます。又、神奈川県で起きた、歴史上例を見ない障がい者殺傷事件は、一人の精神疾患を有する非人道的な人間による事件と捉えるだけでなく、社会の中にある差別や偏見、そして障がい者を無用なものとして扱う優生思想等々の古くて新しい課題をしっかりと捉えて、新たな運動を展開していく必要を実感しました。様々な法整備がなされたとしても、社会の中にある差別や偏見の克服は、日々の当事者の地道な努力が必要であります。

北身協は、北海道の障がい者運動の中核として、様々な課題に取り組んで参りましたが、現状は会員の減少による組織の弱体等多くの課題を抱えております。加盟団体や会員の皆様の英知を結集して、日身連と共に新たな障がい者運動を展開できるよう努力して参る所存であります。

結びになりますが、全ての加盟団体会員の皆様のご多幸とご活躍を祈念し、大会の運営にご尽力頂きました多くの関係者に御礼を申し上げご挨拶と致します。